



京極キャンプ場

# 道経連会報 No.273

## CONTENTS

巻頭言	1
常任理事会講話	2
特集1 「宇宙版シリコンバレー in北海道」実現に向けて	14
特集2 東京五輪札幌開催	28
特集3 カーボンニュートラルの取り組み	37
特集4 アジア・ビジネス創出プラットフォーム	56
視点 MaaSがつなぐ新たな地域公共交通の姿	60
「2022年度国の施策及び予算に関する要望(政府予算要望)」についての会員意見募集結果と提出意見への対応方針について	65
道経連シンポジウム	66
常任理事会レポート	83
委員会等の動き	84
会員企業紹介	92
会員の異動	95
道経連カレンダー	96
新会員企業紹介	97
グループ活動報告	100
北海道の経済動向	106
人事・労務相談日	108
事務局人事	109
Face to Face	110
わがまち紹介(シリーズ43)	112



北海道経済連合会 副会長

**笹原 晶博**

株式会社北海道銀行  
代表取締役頭取

## 北海道をワインの銘醸地に

今思えば、なんと幸運であったか。2019年11月にフランスのブルゴーニュ地方を訪れる機会を得た。コロナウイルスが世界に拡散するわずか数か月前というタイミングであり、その機を逃せば再度のチャンスは無かつただろう。

私はワインにはまったくの素人だが、自分が飲むワインがどこでどのように造られるのかには興味を湧く。今回は、ワインを飲むためのプライベートな旅であったが、多くのドメーンを訪ね、生産者たちのワイン造りへの拘りに直接触れたのは、得難い経験であった。

訪問先はブルゴーニュ地方の中心地であるコート・ドール地区だが、コート・ドールは「黄金丘陵」と訳される。名の由来は、「秋にブドウの葉が変色し、黄金色のじゅうたんを敷き詰めたような景色になるから」とも言われている。例年であればすでにその時期を過ぎ、葉が落ちたブドウの幹や枝だけを眺めることになるのだが、その年のコート・ドールは私に最高の黄金色を見せてくれたことは望外の喜びであった。

ブルゴーニュの特徴は、気候やブドウの品種が同じなのに、隣同士の畑であっても全く異なる

るワインができることだ。コート・ドールでは、南北約50km、幅約500mの細く直線的に続く帯状の緩斜面にびっしりとブドウが植えられている。また、農地全体が1000以上に細かく区画されたクリマと呼ばれる畑で構成され、そのクリマ単位に格付けされている。一つのクリマは1haからせいぜい10ha程度だが、そのクリマも多くの所有者で分割所有されていて、素人目には境界が全く分からない。その「ブルゴーニュのクリマ」は2015年にユネスコの世界文化遺産に登録された。

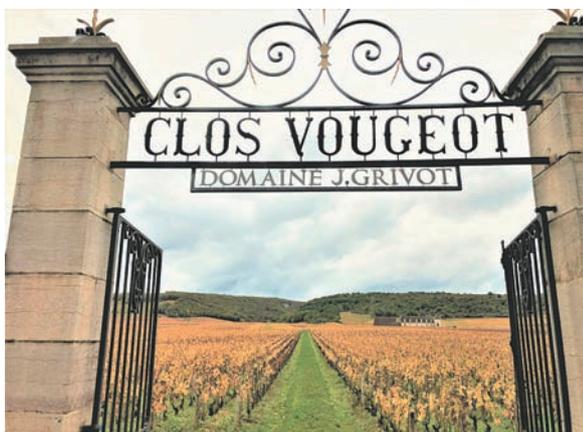
また近年は、春の霜や雹、夏の干ばつなどにより、収量の減少や品質低下のリスクが増しているほか、気温の上昇から収穫の時期はこの100年で2週間早まったと言われている。その危機感からか、2019年7月、300年以上続く名門ドメヌの当主モンティエユ氏が函館に農場を開設した。彼は50年後100年後を見据えて、日本でのワイン造りに挑戦するという。地球温暖化の進行で、北海道がピノ・ノワールやシャルドネといったブルゴーニュの主力品種の栽培適地になると確信したのだらう。

さて、道内には2020年11月現在で47カ所のワイナリーがあり、ワイン用ブドウの栽培面積は国内最大となっている。また報道によれば、「北

大と道が、ワイン産業の振興と技術支援の拠点となる研究センターを2023年度に設立する構想がある」という。

ワインは多くの要素によって影響を受けるが、テロワール(生育環境)と呼ばれる気候や地質がワインに独特の特徴をもたらす。モンティエユ氏も日本の7カ所を候補地に選定したうえで、気象学者や土壌研究者、地質学者による科学的分析を重ねて、函館を選択した。研究センターは、そうした科学的なアプローチによる専門的かつ継続的な研究を可能とし、北海道に適した栽培や醸造技術の進化に寄与するだろう。また、その研究成果を生産者と共有することで、北海道のワインをさらに飛躍させるものと期待したい。

近年、北海道ではワイン生産者が群雄割拠し、年を追うごとにその評価を上げているのはうれしい限りだ。多様な生産者が相互に連携し、かつ切磋琢磨することでそれぞれが特徴的なワインを造り出し、国内はもとより世界の観光客がワインを目的に北海道を訪れる時が来ることを待ち望む。北海道がワインの銘醸地と呼ばれる日がくるまで、まずは私たち道民が北海道産ワインを愛飲し、力強く応援しよう。



ヴージュヨ村にある特級畑



コルトンの丘を望む